

# 『スタンド・バイ・ミー』から考えるパーソナリティの発達

平山洋佑

スティーブン・キングが手掛けた小説、「恐怖の四季」の中にある *THE BODY* を原作として、映画『スタンド・バイ・ミー』が誕生した。映画『スタンド・バイ・ミー』は、主に4人の少年が死体探しをすると同時に、友人関係はどういうものなのか。家庭環境は友人関係に関係あるのかといった側面を描いた作品となっている。また、主人公ゴードィと親友であるクリスとの友情が色濃く描かれている。

『スタンド・バイ・ミー』では、4人の少年たちのパーソナリティの発達が描かれている。4人の少年たちには、家庭環境が恵まれていない少年や、心に深い傷を持ちながら生活を送る少年などがある。そうした中で死体探しというものは彼らにとって成長するきっかけとなった。同じ状況に直面している少年たちが死体探しという1つの目標に向かって力を合わせていくことでパーソナリティを発達させていったのだと考える。パーソナリティというものは、個人に見られるその人らしさを指すもので行動面での反応傾向や知的な面での特性を表している。また、パーソナリティの形成は、主に親のしつけで半分以上は変わると言われている。そうした事を踏まえて、『スタンド・バイ・ミー』を観てみると、主人公ゴードィと親友クリスは、親からのしつけを深くされておらず愛情すら貰えていないことが分かる。しかし、彼ら2人は深い愛情を受けていない穴を互いに埋めた。また、小説内ではある1人の少年がきっかけで死体を探しに行くという旅をした。この旅で絆が結ばれたのは、何故だろうか。それは、お互いがお互いを親だと思い接したからではないとか考える。旅をすることで、自身が持っていた悩みや葛藤を共有することができ、それぞれが成長出来たと私は考える。

死体探しではいくつかの場面で困難な状況に遭遇するシーンがある。そのシーンでは、4人で協力して乗り越えていくというものである。4人で協力して困難を乗り越えるということは、彼らにとって大きな自信に繋がったのではないかと考える。1人で悩み事や困難なことを解決するのは非常に大変だと分からせてくれるシーンでもある。これは現実世界でも同じことが言える。最終的な判断をしなければならぬのはあくまで本人だが、アドバイスを聞くことや友人と協力して何かを成し遂げるといったことは人生において非常に重要なことではないかと考える。

人は自ずと人に頼るものだと私は考える。『スタンド・バイ・ミー』の中にも出てきた4人が協力しながら死体探しをするということはまさに頼ることである。1人の力では絶対に成功は無かった。協力したからこそ悩みや葛藤が消え、旅をする前のパーソナリティと旅をしたあとではパーソナリティの発達具合は全く違うことが分かる。人のパーソナリティは親の影響が強いものなのだが、今回の『スタンド・バイ・ミー』のように友人の影響もパーソナリティには多くの影響を及ぼすことが分かった。人のパーソナリティは友人の影響もあるということが『スタンド・バイ・ミー』では描かれており、スティーブン・キングが何故『スタンド・バイ・ミー』という名前をこの物語の題目になったのかが分かるような気がした。

(指導教員 中村 敦志)